



Title	青木繁と古代ギリシャとの接点 : 『ギリシャ武人』とヒュラスの和歌について
Author(s)	五之治, 昌比呂
Citation	日本語・日本文化. 2023, 50, p. 193-209
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/91270
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

〈研究ノート〉

青木繁と古代ギリシャとの接点

—『ギリシャ武人』とヒュラスの和歌について—

五之治 昌比呂

はじめに

青木繁（1882-1911年）は、『海の幸』『わだつみのいるこの宮』などの個性的な作品を残した明治期の洋画家である。青木と古代ギリシャとの間に深い関係性は認められないが、それでもいくつかつながりを示すものがある。本稿は、そのうちの二つを取り上げて考察するものである。ひとつは『ギリシャ武人』と題された学生時代のスケッチ、もうひとつは青木が作ったギリシャ神話にもとづく和歌である。

1. 『ギリシャ武人』

青木は古代ギリシャの要素をもつ絵画作品をいくつか残している。布に水彩で描かれた円形の『春』『秋』（いずれも 1908 年）は、そのわかりやすい例である¹⁾。中でも異色なのが『ギリシャ武人』という作品である（図 1）。これは紙に鉛筆で描かれたスケッチであり、明治 37 年（1904）の作とされている。現在はほかの多くのスケッチなどとともに長野県の東御市梅野記念絵画館が所蔵している²⁾。

なぜ異色かと言えば、一見してギリシャの武人を描いているようには見えないからである。描かれている人々は兜をかぶっているが、その様子からするとむしろ日本の武者を描いているように見える。本章では、この『ギリシャ武人』についてひとつの仮説を提示したい³⁾。

この作品の疑問点について稿者が東御市梅野記念絵画館に問い合わせたところ、館長の大竹永明氏から詳細な回答をいただいた。ここに記してお礼申し上げる。以下の記述はかなりの部分が大竹氏からの情報に頼ったものである。



図1：青木繁『ギリシャ武人』（1904年）

まずこのタイトルであるが、青木自身が付けたものかどうかはわからない。作品の表には「S. Awoki's Sketch 画稿 春寒野絵より Umeno's Collection」という文字が読み取れるが、これは青木が書いたものではないし作品のタイトルも含まれていない。もしタイトルが書かれているとすれば裏面であろうが、マットに作品を定着させるためのシールが作品の広範囲に貼られているため、裏面を見ることはできないとのことである。それではこのタイトルはどこから来たのであろうか。確認できる記録では、昭和47年（1972）に刊行された画集『青木繁』（河北倫明著、日本経済新聞社）にこの作品がこのタイトルで掲載されており、これが最も古い。また、同年にブリヂストン美術館で開催された『青木繁展』ではこの作品が展示されており、その図録には作品の図版は掲載されていないが、作品リストには『ギリシャ武人』が記載されている。

画集『青木繁』の著者である河北倫明氏は、梅野家に長期間滞在して作品の調査を行ったそうである。その成果が上記の画集と展覧会である。したがって、現在たどれる範囲では、『ギリシャ武人』というタイトルの出所は河北氏であるということになる。スケッチ類には作者が自分でタイトルを付けないことも多いであろうから、河北氏がタイトルを付した可能性はある。しかし、『ギリシャ武人』に関してはそれを疑問視せざるを得ない。このスケッチの絵だけを見て『ギリ

『ギリシャ武人』というタイトルを思いつくことは、まずないからである。おそらく紙の裏面にそのように書いてあった、あるいはそれに類するタイトル（希臘武人、Greek Warriors といった）が書いてあったのではないかと稿者は推測する。まず、絵の面に青木自身がタイトルを書き入れているスケッチもいくつか存在する。次に、画集『青木繁』の作品目録ではスケッチの裏面に別の絵がある場合はその情報の記載があるが、『ギリシャ武人』にはその記載はない。また、絵の面にタイトルが書かれていない作品で、絵だけを見ても付けられないようなタイトルが付されているスケッチがほかにもある。このような点を考えると、『ギリシャ武人』は青木自身がスケッチの裏面に書き入れたタイトルである可能性が高いと思われるのである。

それでは、この作品は何を描いたものなのであろうか。まさに『ギリシャ武人』というタイトルから一つの可能性が思い浮かぶ。それは青木が学生として在籍していた東京美術学校で行われた『美術祭』である⁴⁾。

明治36年(1903)11月3日の天長節に、東京美術学校(東京藝術大学の前身)は『美術祭』を開催した。同校は毎年10月4日に設立記念日の行事を行っていたが、その年は特別な設立記念美術祭を挙行することになった。しかし、10月4日では間に合わなかったので11月3日になったという。祝祭の目的は、日本と西洋の偉大な美術の先達を「祭神」として祀り、敬意を表することであった。当日は東京美術学校所蔵の美術品などの展覧会や、各学科の制作物の展示が行われたが、同時に各学科による様々な余興が行われた。プログラムの記録を見ると、演劇や踊りなどもあるが仮装行列が多い。

その仮装行列の一つに「希臘行列」があった。まずは『校友会月報』(68-69頁)からその情報を転載する。

希臘行列 西洋画科会員(ウーヴァチュア、ソルデアース、ライフ)

題 オリンピア競走

長老…亀山克巳

マルキユーール…井上達三

武人…市川誠一

同……高木誠一
 同……高木巖
 同……関屋敬治
 同……熊谷守一
 護衛八十名

「ウーヴァチュア、ソルデアース、ライフ」は、*Overture Soldiers' Life* であろうか（括弧の中は演奏された曲とのことである）。「マルキユール」はメルクリウス（Mercurius）のフランス語読み（*Mercure*、英語では *Mercury*）であろう。ギリシャ神話の神、ヘルメスのことで、古代ローマではメルクリウスと呼ばれた。目を引くのは、「武人」の一人として、後に高名な画家となる熊谷守一の名前があることである。

このとき青木は21歳で、東京美術学校西洋画科の4年生である（9月に進級）。『没後100年 青木繁展』図録の「青木繁 年表」によると、高木巖、関屋敬治（敬次）、熊谷守一は同級生である。青木がこの行列に参加していたかどうかは不明である。稿者が初めて「希臘行列」の存在を知ったのは、当時の美術雑誌『美術新報』によってである。明治36年（1903）の2巻17号の「時報」に比較的詳しい記述がある。青木の『ギリシャ武人』はこの「希臘行列」の様子を見て描いたものではないか、というのが当初の仮説であった。参加していたかどうかはわからないが、友人たちが出ているので少なくとも見物ぐらいはしたのではないかとと思われるからである⁵⁾。また、『ギリシャ武人』の制作年は1904年とされており、この催しの翌年である。

しかし、その後『校友会月報』のより詳しい情報を見るにおよんで、その仮説は否定されることになった。まず、この行列がどのようなものであったか、『校友会月報』の記述（64-65頁）を引く。

次は希臘行列のオリンピア競走（西洋画科有志）、先程から屈指の晴れ業を見て来た観衆は、今又好奇の眼を以て迎へるのである、只見る白髪長老十字の錫杖を執て壇上に立ち、五人の武人頭には下垂り尾長き鶏頭帽を冠り、

腰にはフスタネラ〔稿者注：スカート型の下衣〕を着けた半裸の姿に、飽く迄雄健格の雄健を示して、競争三廻、マルキユール、長老より桂冠を受けて是を勝者に授けるのであるが、好個行列も惜しい哉、競争場の狭い為に活気に乏しかつたかと思ふ。

また、この「武人」の写真⁶⁾が掲載されているので、転載する（図2）。



図2：『校友会月報』掲載の「希臘行列」の写真

記述と写真が示すように、「武人」のかぶっている兜は、それなりに古代ギリシャ風のものであり、青木の『ギリシャ武人』の兜とは明らかに異なる。「護衛」は日本風の兜を着けていたという可能性もあるが、きわめて低いであろう。写真を見るかぎり、青木の『ギリシャ武人』がこの「希臘行列」の武人を描いたものであるとは言えない。当初の仮説は否定されたことになる。

ただし、『美術祭』には日本の武者行列もあった。「希臘行列」の次に行われた「凱旋行列」というもので、日本画科の学生42名が参加したことになっている。

『校友会月報』にその内容の記述はないが、『美術祭記念帖』に基づく『百年史』の記述（231頁）には、「関保之助の指導で鎧武者や束帯の文官に扮して演じた」とある。また、『校友会月報』には「凱旋行列」の写真が三点掲載されている。そのうち、人物が兜をかぶっている二点を転載する（図3、図4）。



内之行列凱旋祭術美念紀

図3：『校友会月報』掲載の「凱旋行列」
の写真



中の行列凱旋祭術美念紀

図4：同左

青木が描いたのはこの「凱旋行列」だったのではないかというのが、現在の仮説である。青木のスケッチからすると、武者役の学生たちが行列が始まるのを待っているところのようにも見える。もしこの仮説が正しいとすると、『ギリシャ武人』というタイトルは青木の記憶違いによるものであると考えられる。あるいは、「希臘行列」の様を描いたつもりが、「凱旋行列」の記憶と入り混じってしまったのであろうか。スケッチが1904年に描かれたものだとなれば、『美術祭』から少々時間がたっており、青木は記憶で描いていることになるが、行列についての記憶が混乱していたのかもしれない。

もうひとつの可能性は、青木が『美術祭』を見ていなかったのではないかということである。翌年、なにかの機会に「希臘行列」のことが話題になり、自分の友人たちが出演していた行列のことを想像で描いたのではないか。実際に見ていなかったのも、兜はギリシャ風のものではなく日本風のものになってしまったのではないか、ということである。残念ながら、いずれも仮説にとどまり、稿者の想像の域を出るものではない。

2. ヒュラス（ハイラス）の和歌について

青木はかなりの数の和歌（短歌）を作っている。歌集の成立事情は不明であるが、青木の没後に出版された『青木繁画集』（政教社、1913年）には「歌稿」の見出しのもと、「うたかた集」「村雨集」という二つの歌集が収められている。前者は56首、後者は28首からなる。その後、青木繁『假象の創造 増補版』（中央公論美術出版、2003年）では、「短歌」の章に「うたかた」「村雨集」として収められている。『假象の創造』には、「雑詠」としてさらに5首の和歌と9句の俳句も追加されている⁷⁾。その「うたかた」の中に次の作品がある。

人面の白きに似たる^{ひつじぐさ}睡蓮／ハイラスの名よ池のひめごと

「ハイラス」は Hylas の英語読みであり、古典ギリシャ語に近く表記すれば「ヒュラス」である。ヒュラスはギリシャ神話に登場する人物で、英雄ヘラクレスが自分のお供にしていた美少年である。ヒュラスに関する神話でとくに有名なものは、次のような話である。ヘラクレスはヒュラスをともなってアルゴ船の遠征に参加する。一行が小アジアのミュシアに寄港した際、ヒュラスは水をくむために泉に向かう。その泉にはニンフたちが住んでおり、ヒュラスの美しさに惹かれて彼を水中に引き入れてしまう。ヘラクレスはヒュラスを捜索するが見つめることができなかった⁸⁾。青木の歌の「池のひめごと」とは、泉のニンフたちがヒュラスを水の中に誘拐したことを指すと思われる。

青木はこの古代ギリシャの神話をどのようにして知ったのであろうか。じつは、この歌はある絵画作品をすぐに連想させる。それはイギリスの画家ジョン・ウィ

リアム・ウォーターハウス（John William Waterhouse, 1849-1917年）の『ヒュラスとニンフたち』（Hylas and the Nymphs）という 1896 年の作品（図 5）である⁹⁾。



図 5：ウォーターハウス『ヒュラスとニンフたち』

ウォーターハウスの作品が描いているのは、水をくみに来たヒュラスをニンフたちが今まさに水中に引き入れようとしている場面である。青木の歌はこの絵画を詠んだものであろう。青木の歌をウォーターハウスの絵と結びつける理由として「睡蓮」がある（ヒツジグサはスイレンの一種である）。古代のヒュラスの神話にはとくに睡蓮は登場しない。そのため、青木が書物などでギリシャ神話を知っていたとしても、その知識によって睡蓮を詠み込むことはない。ウォーターハウスの絵から着想を得て歌を詠んだと考えるのが自然であろう¹⁰⁾。

それでは青木はこの絵をどうやって見たのであろうか。この問いは、当時の日本人がどのようにして西洋美術に接していたのかという大きな問題に包含されるが、本稿ではそのような大きな問題には触れない。個人的な印象であるが、この問題は現在のところきちんとした研究がなされていないように見える。青木の西洋美術受容についても、彼の作品とある西洋の作品との影響関係が指摘される際

は、単に「見た目が似ている」ということが根拠になっており、青木が「どのような方法で」その作品を目にしたのかという問題は等閑視されていることがほとんどである¹¹⁾。本章では、青木が何によってウォーターハウスの作品を見たのかを可能な限り明らかにしてみたい。

まず、青木が書いたもの（『假象の創造』所収のもの）の中に手がかりを探したが、ウォーターハウスの名は見られない。青木はモローやバーン＝ジョーンズらの西洋の画家にしばしば言及しているが、ウォーターハウスの名は挙げていない。よって、青木自身の著述からの手がかりはない。

次に、青木が所蔵していた西洋の美術書がある。C. H. Letts が編集した *The Hundred Best Pictures*（青木が持っていたのは 1901-1902 年刊行の American Edition）という本である¹²⁾。この本の中にはウォーターハウスの絵もあるが、『シャロットの女』（1888 年）という作品であり『ヒュラスとニンフたち』はない。

青木は留学していないので、海外でこの絵に触れた可能性はない。当時東京美術学校で教えていた黒田清輝や岩村透のような海外留学経験者が、海外で買い求めた資料を授業などで見せ、青木もその機会に見たという可能性はもちろんある。しかし、管見のかぎりそのような資料は見つかっていない。それよりは、自分で図書室の美術書や美術雑誌を見たという方が可能性が高いのではないだろうか。青木は在学中研究熱心であったことで知られており、たとえば親友であった梅野満雄は追想記「噫青木繁君」の中で、青木が寺に仏典の講義を聴きに行くこともあり、上野の図書館（帝国図書館）にもよく通っていたことを伝えている¹³⁾。帝国図書館を頻繁に利用していたということは、東京美術学校の図書室も利用したはずである¹⁴⁾。

稿者が調べた範囲では、可能性のあるものが四つ見つかった。それは西洋から輸入した美術雑誌である。あらゆる雑誌を探すことはできないので、青木が在籍していた現在の東京藝術大学（以下、藝大）の附属図書館（以下、藝大図書館）に所蔵されている雑誌を探した。なお、藝大図書館の OPAC で「waterhouse」を検索語として検索しても、古い文献は一つもヒットしない。つまり、ウォーターハウスの画集のような単行本は東京美術学校の図書室で見ることではできなかった

はずである。また、『文学界』『新著月刊』『明星』『美術新報』『白百合』といった日本の雑誌でこの絵の図版が掲載されている例は、稿者が調べたところでは見られない。

『ヒュラスとニンフたち』が掲載されている西洋の雑誌の名前、号、年、掲載ページは以下のとおりである。

- (1) *Gazette des Beaux-arts*, 3-18, 1897 年, 255-256 頁
- (2) *Royal Academy Pictures*, 1897 年（号数の記載はない）, 190 頁
- (3) *The Studio*, 10, 1897 年, 243-247 頁
- (4) *The Nation's Pictures*, 1, 1902 年, 29 頁

(1)～(3)については、雑誌は藝大図書館に所蔵されているが、『ヒュラスとニンフたち』が掲載されている号は所蔵されていない。当該号が所蔵されているのは(4)のみである。

The Nation's Pictures について詳しいことはわからなかったが、表紙には、英国の公的なギャラリーにある優れた現代絵画からのセレクションであると書いてある。体裁は雑誌というよりは画集に近い。確認できる範囲では第4号まで刊行されている（藝大図書館には全号所蔵されている）。また、“REPRODUCED IN COLOUR”とあって、そのとおり図版はすべてカラーである。これは当時の出版物としてはかなり珍しいことである。ただし、図版はカラー写真ではない。三色版印刷で再現したもののようなのだが、そのようなものとしては非常に優れたものだと思う。冊子の冒頭には簡単な序文と掲載作品のリストがあり、その後は作品が羅列されている。最初に作品についての解説文が1ページあり、白紙ページを挟んで作品の図版のページがある。図版は別に作られたもので、ページに貼り付けられている。それ以上の記述はないので、雑誌というよりも画集の印象を与えるのである。この雑誌に掲載されている『ヒュラスとニンフたち』の図版を図6に示す。



図6: *The Nation's Pictures* 掲載の『ヒュラスとニンフたち』

The Nation's Pictures については、青木と同時期に東京美術学校の学生であった南薫造(1883-1950年)の証言がある。南は広島県呉市出身の洋画家で、1902年から東京美術学校で学んだ。彼はかなりの量の日記を残しており、東京美術学校時代の日記も現存している。1903年2月6日の日記に次のような記述がある¹⁵⁾。

今週は二枚画き上げたので愉快に文庫にと出かけた。丁度 nations picture だの academy だのが来て居るので面白く見た。特に nations picture の美しい事、欲しくて耐へられない。が金が無いと云ふのは例の如しだ。而し夏休休暇迄にはどーか苦面して求め度いものだ。

「文庫」とは東京美術学校の図書室のことで、「nations picture」は *The Nation's Pictures*、「academy」は *Royal Academy Pictures* のことであろう。これらの雑誌が東京美術学校の図書室に入ってきており、学生は自由に見ることができたことがわかる。また、南が「美しい」「欲しくて耐へられない」と言っているのは、珍しいカラー図版であったからだと思われる。

ウォーターハウスの『ヒュラスとニンフたち』も、原画の繊細な部分は失われているとしても、かなり鮮やかな色彩で作品を楽しむことができる。青木はこの図版で『ヒュラスとニンフたち』を見たのではないだろうか。この第1号は1902年のものだが、青木が在学中の1903年か1904年には図書室で見ることができたのではないかと推測する。

次に、青木の歌である「人面の白きに似たる睡蓮／ハイラスの名よ池のひめごと」について詳しく分析してみる。「人面の白き」については、モノクロでも同様に感じるかもしれないが、カラーではニンフたちの顔がより明確に白く見える。「睡蓮」は、もちろんモノクロでも判別できるが、カラーだと一目瞭然である。しかし、「人面の白きに似たる」というのはこの図版に合わないように思われる。色については、ニンフたちの顔と睡蓮はまったく異なるので、むしろモノクロの方が睡蓮も白っぽく見えると思う。「似たる」は「白き」ではなく「人面」のことだけを言っているのかもしれない。だとしても、形姿についても両者はあまり似ているようには見えないので、それは青木独自の感性ということになるであろう。

「池のひめごと」とは、すでに述べたとおり、ニンフたちがヒュラスを泉の中に引きずり込んでしまったことを指すであろう。これはヒュラスの神話の内容を知らなければ書けないことで、絵の図版だけを見ても当時の一般の日本人には知り得ないことである。上述のように、*The Nation's Pictures* は図版の前に絵の解説がついている。その説明によれば、ヒュラスの話はもともと水をくみに行って池に落ちて溺れたという話であったが、詩人たちが肉付けして悲劇的な話にした、川のニンフたちがヒュラスの美しさに惹かれて、彼を水の中に引き込んで連れ去った、としている¹⁶⁾。青木はこの程度の英語は読めたであろうから、「池のひめごと」と詠むための神話の知識はここから得られたはずである。この解説の存在も、*The Nation's Pictures* を源泉として想定する根拠の一つである。

青木の歌は「睡蓮」に焦点が当たっているように思える。このことと、「ひめごと」という言葉から推測するなら、青木が詠んでいる情景は、ヒュラスが水の中に引き込まれてしまった後の、水面には睡蓮しか見えない状態ではないだろうか。ヒュラスとニンフたちは今や水の底におり、「ひめごと」を知るのは池の睡

蓮のみというわけである¹⁷⁾。すなわち、ウォーターハウスが描く、今まさにヒュラスがニンフたちに引き込まれようとしている劇的な場面ではなく、その後の静寂の中にある情景を想像して歌っているのではないかということである。水面に浮かぶ睡蓮は、先ほどまで水上に姿を見せていたニンフたちの顔を連想させるということかもしれない。そのように推測するなら、現実世界の睡蓮を見た青木が、ウォーターハウスの作品を思い出して詠んだ歌という可能性も考えられるであろう。

おわりに

以上、青木繁と古代ギリシャとの接点を示す二つの例を取り上げ、考察を行った。1904 年の作とされる青木のスケッチ『ギリシャ武人』は 1903 年に東京美術学校で開催された『美術祭』の「希臘行列」、もしくは「凱旋行列」の一場面を描いたものではないか、また、青木が残したヒュラスに関する和歌はウォーターハウスの『ヒュラスとニンフたち』を見て詠んだもので、それはイギリスの雑誌、*The Nation's Pictures* に掲載されているカラー図版を見たのではないか、というのが本稿の仮説である。後者については、もちろんほかの可能性もあるが、ある程度実証的に根拠を示すことができたのではないかと思う。前者については、『美術祭』と関係があるということを前提としており、残念ながら現在のところは仮説にとどまっている。今後、新しい資料が発見されて事実が明らかになることを期待したい。

図版出典

図 1：森山秀子・植野健造・貝塚健・山野英嗣編著『没後 100 年 青木繁展－よみがえる神話と芸術』図録、石橋財団美術館・石橋財団ブリヂストン美術館・毎日新聞社、2011 年、105 頁。

図 2：東京美術学校校友会編『東京美術学校校友会月報』第二巻第三号、1903 年 12 月 24 日発行、54 頁。

図 3：同上、49 頁。

図 4：同上、70 頁。

図 5：Wikimedia Commons.

図 6：The Nation's Pictures, 1, 1902 年、29 頁。

注

- 1) 作品のタイトルと制作年は森山秀子・植野健造・貝塚健・山野英嗣編著『没後 100 年 青木繁展－よみがえる神話と芸術』図録（石橋財団美術館・石橋財団ブリヂストン美術館・毎日新聞社、2011 年）に拠る。
- 2) 青木の死後の大正 14 年（1925）、親友であった梅野満雄は青木が残した作品を遺族から買い取った。青木の作品の約八割と言われている。東御市梅野記念絵画館編『青木繁のデッサン 梅野コレクション・藤井コレクション』（東御市・東御市梅野記念絵画館、2015 年）2 頁、35 頁参照。しかし昭和 15 年（1940）に梅野は、作品管理の難しさから作品のほとんどを手放した。梅野が持ち続けた作品は、息子の梅野隆に引き継がれ、寄贈により最終的に当館の所蔵となった。『ギリシャ武人』もそのコレクションのひとつである。梅野と青木の関係については、竹藤寛『青木繁と坂本繁二郎－「能面」は語る』（丸善ブックス、1995 年）が詳しい。
- 3) 注 1 の図録『没後 100 年 青木繁展』、注 2 の図録『青木繁のデッサン』にはこの作品が掲載されているが、とくに解説は付されていない。青木のデッサン・スケッチに関する先行研究としては、高橋沙希『青木繁一世紀末美術との邂逅－』（求龍堂、2015 年）の第三章「デッサンから見る海外の美術作品との交流」、同氏「デッサンからみた青木繁作品」（『関西大学東西学術研究所紀要』50、2017 年）がある。前者は『ギリシャ武人』に触れており、「青木が実際にギリシャの武人を目にする機会は、当然なかったはずなので、この作品も海外から輸入された何らかの資料を参考にして描かれたものであろう」（100 頁）としている。もちろん、その可能性もあるが、現在のところそうした資料を特定することは難しいので、今回、別の可能性を仮説として提示する。
- 4) 『美術祭』についての情報は、『東京美術学校校友会月報』第二巻第三号（東京美術学校校友会編、1903 年 12 月 24 日発行）、『美術祭記念帖』（東京美術学校校友会編、1906 年 3 月）、『東京芸術大学百年史（東京美術学校篇 第二巻）』（東京芸術大学百年史刊行委員会編、ぎょうせい、1992 年）229-235 頁に拠る。以下、文献から引用する際は適宜旧字を現行のものに改める。
- 5) 青木が高木、関屋、熊谷らと撮った明治 37 年の写真がある。青木繁『假象の創造 増補版』（中央公論美術出版、2003 年）の口絵で見ることができる。青木は熊谷とは特に親しかった。
- 6) 注 4 の『美術祭記念帖』には別の写真が掲載されているが、鮮明な複写が困難であった

ため転載は控える。その写真は次のような場面である。設けられたステージの上に「長老」と、従者役と思われる人物6名が立っている。ステージの下には「武人」5名と「マルキユール」が立っており、武人の一人が長老からなにかを受け取っている（桂冠であろう）。マルキユールは翼のついた兜をかぶって、「ケリュケイオン」という特有の杖を持っており、ギリシャ神話の正しい知識にもとづいて装備品を作っていることがわかる。

- 7) 青木の和歌に関する先行研究としては、野田一好「短歌にみる青木繁—その『渦』と『運命』—」（『九州大谷国文』16、1987年）と中野久美子「青木繁の短歌—『うたかた集』にみる絵画と短歌の交感」（『待兼山論叢 文学篇』48、2014年）があるが、本稿で扱うハイラスの和歌についての考察はない。
- 8) この話について最も詳しい古代の典拠は、ロドスのアポロニオス『アルゴナウティカ』1.1207以下である。ほかに主な典拠としては、テオクリトス『牧歌』13、アントニウス・リベラリス『変身物語』26.4、アポロドロス『ギリシャ神話』1.9.19、ウェルギリウス『牧歌』6、プロペルティウス『詩集』1.20などがある。
- 9) 本作はマンチェスター市立美術館が所蔵しており、当館のウェブサイトにも作品の画像が掲載されている。
- 10) この歌がウォーターハウスの絵画にもとづくものであるとの指摘は、芳賀徹『絵画の領分』（朝日選書、1990年（初出1984年））396-397頁にすでにある。青木は「晶き日を緑の波に子を抱きて／人魚の母の沖に泣く声」「きしきしと灘にさしたる上げ潮に／人魚泣く宵月焼赫かき」という歌も作っており、芳賀氏はウォーターハウスの『人魚』（1900年）に想を得たものと考えているようである。ウォーターハウスの『人魚』は1983年に開催された『青木繁＝明治浪漫主義とイギリス展』に出展されたが、青木の『温泉』（1910年）という絵画との類似を示すために選ばれた。稿者が調べたかぎり、青木が見た可能性のある本や雑誌の中にこのウォーターハウスの『人魚』は見つからなかった。なお、ウォーターハウスの描く人魚は「子を抱く母」の姿ではない。また、青木の歌のルビ「ドゲル」の意味は不明である。
- 11) ラファエル前派についてであれば、青木のラファエル前派受容に関する実証的な研究に、杉本秀子「明治期のイギリス美術紹介—青木を焦点とする—」（『青木繁＝明治浪漫主義とイギリス展図録』、東京新聞、1983年、178-183頁）がある。これは主に国会図書館（旧帝国図書館）と東京藝術大学附属図書館の蔵書を調査したものである。青木との影響関係が問題になっているロセッティやバーン＝ジョーンズらは、当時彼らに関するある程度の書籍が日本に入ってきており、日本の雑誌等でも紹介されていた（杉本氏が詳細なリストを挙げている）。つまり、当時の日本ではラファエル前派の作品の図版を見ることは比較的容易であった。しかし、ウォーターハウスの作品はそれほど簡単ではなかったはずである。ウォーターハウスはラファエル前派から影響は受けたがこの一派の中には入っていないため、当時のラファエル前派関連の書物では

ウォーターハウスの作品を見ることはできなかったと思われる。可能性があるとするれば、ラファエル前派も含めたイギリス絵画一般を扱うような書物であろう。稿者が調査したかぎりではウォーターハウスの『ヒュラスとニンフ』を掲載するものは見つからなかったが、未見のものが多いのでさらなる調査が必要である。なお、杉本氏は稿者が本文で候補として考えている雑誌はリストアップしていない。

- 12) 『没後 100 年 青木繁展』図録、139 頁に写真が掲載されている。この本は東京藝術大学附属図書館にも国会図書館にも所蔵されている。
- 13) 青木繁『假象の創造』288 頁（梅野満雄「噫青木繁君」）。同じく親友であった洋画家の坂本繁二郎も「追想記」の中で、「それから二年目に美術学校に入り、図書館にしきりと通ったさうだが、どんなものを勉強したかは知らない」と書いている（同 217 頁、坂本繁二郎「追想記（その一）」）。
- 14) 以下の本文で候補として挙げた西洋の美術雑誌は、国会図書館には所蔵されていない。また、国会図書館のウェブサイトで「waterhouse」で検索しても、古い文献はヒットしない。
- 15) 引用は、藤崎綾「南薫造の中学・美校時代－1900 年～1904 年までの 2 冊の日記から」（『広島県立美術館 研究紀要』12、2009 年、1-48 頁）に拠る（引用文は 13 頁）。表記は基本的にこの翻刻に従っているが、読みやすさを考慮してカタカナはひらがなに改め、改行を示す「／」は省略する。
- 16) この解説ページの神話の説明は独特であり、細部においては古代の伝承とかなり異なる要素も含まれている。
- 17) 青木は「水の中の生」とも言うべきモチーフの絵画作品をいくつか残している。最も有名なのは『わだつみのいるこの宮』（1907 年）であり、ほかに『運命』（1904 年）、岩野泡鳴の詩集『夕潮』の表紙画（1904 年）などがある。もちろん、そのような作品がウォーターハウスの影響によるものだと主張しているわけではない。「水の中の生」のモチーフは、西洋絵画にある程度見られるものである。また、青木が自分の想像力で生み出した可能性も否定できない。余談ながら、『わだつみのいるこの宮』を高く評価した夏目漱石は、『草枕』（1906 年）でこのモチーフを扱っている。詳しくは、飛ヶ谷美穂子『漱石の源泉－創造への階梯』（慶應義塾大学出版会、2002 年）第一部第二章『風流な土左衛門』考－漱石・スウィンバーン・サッフォーー」参照。

Aoki Shigeru and Ancient Greece: “Greek Warriors” and a *waka* on Hylas

GONJO Masahiro

This paper is intended as a study on the relationship between Aoki Shigeru, an artist of Western painting in the Meiji period, and ancient Greece. The first thing showing their relationship is a sketch titled “Girisha bujin” (Greek Warriors), which Aoki made in 1904. It has an enigma of subject matter, because the persons drawn there do not look like Greek warriors but Japanese ones. One hypothesis is that Aoki drew the sketch based on what he saw in “Bijutsu sai” (Art Festival) held by the School of Fine Arts, Tokyo, which he belonged to at that time. For a performance with disguised Greek warriors, named “The Greek Pageant,” was given in the festival. However, the disguised warriors in the photographs are quite different from those in Aoki’s sketch. The persons in the sketch have some resemblance to the Japanese warriors in another pageant for the festival, which was titled “The Triumphal Pageant.” It is my presumption that Aoki suffered some lapse of memory or he made the sketch in his imagination without watching the pageants with his own eyes.

The second thing is a *waka* (Japanese short poem) Aoki composed on Hylas, a figure in the Greek mythology, who is known for his handsomeness and the story that he was kidnapped by water nymphs. It is sure that the *waka* is based on a painting by John William Waterhouse under the title of “Hylas and the Nymphs,” because Aoki mentions the water lilies in the poem, while Waterhouse’s painting is impressive with the water plants. I suggest a hypothesis about by what means Aoki saw this painting. It is most plausible that he came across the work when seeing an art magazine, *The Nation’s Pictures*, owned by the library of the School of Fine Arts, Tokyo. For the reproduction in the magazine is in color and there is a commentary page for the painting before the page of the art work. That commentary gives mythological information enough for Aoki to make the *waka* on Hylas’ story, which was unfamiliar to the Japanese people in the Meiji period.